

第 36 期小田原市図書館協議会 第3回協議会 会議録

日 時 令和7年 11 月20 日(木)9 時 30 分から 11 時 00 分まで

場 所 小田原市立中央図書館2階 集会室

1 開会

2 部長あいさつ

3 協議事項

(1)子ども読書活動に関するアンケート調査の実施について【資料1】

○事務局説明(植田副館長)

〔加地委員〕 (資料1付属資料 P3・P6質問②について)平成 27 年度と令和3年度のアンケート結果を比較すると「毎日」「週に1日以上」読書している子どもが平成 27 年度の0%から増えているのはなぜか。なにか取組をしていたのかお聞きしたい。

〔植田副館長〕 令和元年以降、コロナ禍であったため、家で過ごす時間が長かったことから、本を読む子どもが増えたのではないかと考えている。

〔三樹係長〕 月に1日～3日の子が流れているのかもしれない。

〔野口委員長〕 実施方法を従来の紙ベースの配布から変更して Web 調査へ変えるということだが、従来紙ベースで配布しそれなりに回収できたかと思うが、回答数は前回並みに得られる見込みなのか。多少減ってしまっても仕方ないという捉え方なのか伺いたい。

〔植田副館長〕 前回は、各学年1クラスを対象としていたが、今回は全児童生徒を対象とすることから前回よりも母数が増えるので回収率は減るかもしれないがそれほど影響はないのではないかと考えている。

〔野口委員長〕 回答状況をみて、回答のない方への回答の依頼は複数回行うのか。

〔植田副館長〕 さくら連絡網で数回に分けて回答の依頼をしようと考えている。

〔野口委員長〕 やりかたを変えると回収率が下がるというような調査もあるので、何回かに分けて呼びかけをしてもらえるのであれば、回答してもらえと思う。

〔加藤委員〕 保護者を介して周知するが、実際に回答するのは学校で行うのか家庭で行うのか。

〔植田副館長〕 家庭での回答を想定している。

〔加藤委員〕 意識の高い方は回答し、あまり関心のない方はスルーしてしまいがちなので数値としては高くでるのではないと思う。

〔植田副館長〕 複数回の回答依頼をするので、回答してくれるのではないかと希望を持っている。

〔野口委員長〕 1人1回のみの回答か。

〔植田副館長〕 1回のみである。

〔加藤委員〕 本校は、兄弟が多い家庭が多いが、家庭数ではなく、児童1人1人に対して回答を依頼するのか。

〔植田副館長〕 そのとおりである。

- 〔北河副委員長〕 アンケートは Google フォームみたいなもので送るのか。
- 〔植田副館長〕 Google フォームで作成するか、または市のホームページのフォーマットで作成するか検討中である。
- 〔北河副委員長〕 色々なところでアンケートが行われているが、今の若い方は機械になれているので、紙より簡単に回答できるので、WEB のアンケート調査の方が回答率がいいと思う。色んな懸念はあると思うが、いい方法だと思う。
- 〔野口委員長〕 依頼をするときは QR が付いていて、スマートフォンで回答ができるようなスタイルになっているのか。
- 〔植田副館長〕 そのとおりである。幼稚園と保育園に関しては、チラシ等に QR を記して配布し、回答してもらうやり方を考えている。
- 〔野口委員長〕 やり方の意見はいただいたが、中身の方はいかがか。
- 〔加藤委員〕 (資料1 P4質問6について) 本が手元にあることが1番大事と考えているので、学級文庫やブックバッグで本がすぐ手に取れるような活動をしている。このため、設問のとおり、「図書室を」でもいいが「学校の本を」という文言があればありがたいと思う。学校の図書室が校舎の端にあり、なかなか行きにくいので別のところにコーナーを設けていたり、色々工夫をしているのでこのような表現にしていただけると違うと思った。
- 〔野口委員長〕 私は学校図書室の利用実態を把握しておいた方がいいと思うので、設問を切り分けてもいいと思った。
- 〔加藤委員〕 要望も含んでしまうが、小田原の学校図書室はバーコード管理ができていない。箱根や湯河原町に勤務していた時は、平成 20 年度には既にバーコードで管理ができていたので、例えば今月何年生がたくさん読んでいたとか、卒業するまでにどんな本を読んでいたか履歴が分かったり、色んな事が出来ていた。現在、学校では読書週間だが、せっかく学校図書室に本を借りに来た子たちが、図書委員がカードを書くのを並んで待って諦めて外遊びに行ってしまう姿を見て、もったいないと感じた。学校図書室でバーコード管理ができない現状をなんとかしてほしいという要望がある。バーコード自体は貼ってあるので、バーコードでの管理を実施することで、本を借りる意欲に繋がり、貸し出しについてもスピーディにできると思う。
- 〔野口委員長〕 加藤委員の御要望をうまく計画に反映させていくという視点で言うと、これまでの子ども読書活動推進計画の検討は図書館協議会の中で中央図書館の事務局をベースに行ってこられたと思うが、学校教育の部局の方々にも検討の機会には入っていただいた方が本当はいいのではないかと思う。つまり、子ども読書活動の推進は市の図書館だけでできる話ではなく、もう1つの車の両輪は学校図書室、学校教育だと思うので、両方で検討できる体制作りをご検討いただけると、加藤委員の御要望を計画の中に取り入れられるような気がするので、事務局でご検討いただけるとありがたい。
- 自治体ごとにやり方は様々なので他の自治体が良い悪いではないが、子どもの読書推進計画の検討の委員会に学校教育の部局にも入ってもらっているケースもあり、そうすると学校関係の方は読書ってすごく大事だよねとか、学校

図書室も力入れなきゃと思っていただけるケースもあるので、そのような検討体制をご検討いただけるとありがたいと思う。この委員の皆さんも十分わかっていることであるが、これまで小田原市の図書館としてすごく熱心に、色々されてきて、でも度々話題になって事務局の皆さんも正直困ると思うのは学校図書室の話題が結構出てきてしまう。ただ、そこも含め市の計画を見直していこうというタイミングなので、学校教育の関係の方にも入っていただく形で、検討ができると、よりよい計画ができていくと思う。

可能であればぜひご検討をいただけるとありがたい。

〔竹縄館長〕

野口委員長のおっしゃる通り、図書館協議会の場合でも学校図書室において、バーコードは貼られているが活用が不十分であることも、かねてからこの場でも話題として出てきている。その点が、実際の学校教育部局の方に、伝わらないことには、話が進まないということは重々承知しているので、今おっしゃったようなご意見は、私どもからもお伝えして、そのような仕組みづくりの要望についても併せてお伝えする。

〔星崎委員〕

(資料1 P4 質問3について)その他を除くと選択肢が2つしかないが、このようなアンケートは選択肢にぴったり合うと選びやすいが、選択肢がないとそれを自分の気持ちや心情を言葉にして入力するのが億劫だったり、うまく書けなかったりする。正しいものを選べず、こっちでいいやとなってしまうときに、もう1つ2つ選択肢としてあったらいいと思った。

例えば、読書をしない人の気持ちになって考えたときに、読書自体に興味がない人、本を読むことが苦痛であったり、つまらないと思う人もいると思うので、そういった人が選べる項目が1つあるとその他を入力する煩わしさがなくなり、本当の気持ちが掬えるのではないかと思った。選択肢として、検討していただけたらと思う。

〔植田副館長〕

おっしゃるとおりであるので、検討する。

〔野口委員長〕

文化庁が令和5年に行った、国語に関する世論調査で国民の読書の実態を調べている。そこでは読む量が減った理由として、項目で挙がっていたのが、忙しい、スマホなど情報機器の操作に時間がとられているという項目と、視力などの健康上の問題、というのは大人を対象としているからなのか、本当は読みたいが読みづらさを感じている子どもも一定数いる可能性もあるので、そういう視点もありだと思う。忙しいも、習い事とか勉強とか、プラスの意味での忙しさだが、もしかするとゲームとか、違うことで時間を使っているというケースもあり、理由としては色々挙がりそうである。今 TikTok とか、動画にはまっている子どもはそればかり見てたりするので、それだったら読書して欲しいという思いがある。

〔加地委員〕

(資料1 P6 質問11について)選択項目2は、そもそも興味があるのかないのかという所も気になるので、興味がないという項目もあると良いと思う。

〔野口委員長〕

Web での回答となると、紙での回答よりは若干質問が増えても回答しやすいと思うので、今色々追加でこういうことを尋ねてみてはというご意見があったが、私はこれを拝見して、ここに挙がっている項目は、的確な項目だと思うの

で、今あるものを無理に削らなくても、いただいたご意見をプラスできそうならご検討いただけるとありがたい。

4 報告事項

(1)市議会 9月定例会報告について【資料2】

○事務局説明(竹縄館長)

○質疑応答

〔北河副委員長〕 雑誌の購入について、雑誌があることによって図書館へ来るハードルが格段に下がると思うので非常にいいと思う。

〔竹縄館長〕 副委員長がおっしゃった趣旨の見解を図書館としても持っている。質問の趣旨としては、具体的に例示すると anan とか週刊ベースボールとかそういったものについては、図書館で備えていくという必要性は比較上は低いのではないかなというような観点からのご質問である。年間予算を持って、一般的に手に入りにくい高額な図書を購入して備えていく、それこそが本来の図書館の機能ではないかという考え方もおありなのかなとは思いますが、雑誌をやめてしまうわけにもいかないと考えているので、このような答弁をさせていただいたという経緯がある。

〔加藤委員〕 資料2 P2 にある、学校図書室と本市の公立図書館との連携について本当にありがたいと思っている。団体貸し出しが、30 冊までだったものが今は 100 冊に増えているし、この学習用端末で電子図書館を利用するということについても、初めはまだ慣れなかったが、今年度できたこととして、小学校教育研究会国語部が、中央図書館で研修会を開いて、電子図書館の利用の仕方であったり、公共図書館との連携について話題にして研修を深めることができた。改めて知ったことが多く、例えば電子図書館は普通 1 人が読んでいたら、他の人は読むことはできないが、読み放題パックというものがあるとか、現場の教員が知ることができないので、図書館経営を担う国語部の先生方が参加している場で、それぞれの学校で広めていただいているということはすごく大きく、大変感謝している。

〔竹縄館長〕 やはり電子図書館については、新しい分野で、なかなか市民全般に定着してない部分もあるので、利用率の安定というものが今後の予算獲得であるとか、そういった部分についても非常に重要なところとなると思うので、ぜひ学校の皆さんに利用促進へのご協力をいただければと思っている。

〔星崎委員〕 一箱本棚を見るのが好きで、いつもだと個人の方が利用されていて、空きの棚も時々あるが、今日はたくさん埋まっていた。鴨宮中学校の図書委員が手づくりで色んな本を紹介していて、図書館の本の貸し出しという連携はもちろんありつつ、そういった図書委員や生徒児童が、図書館を作っていくというの、連携なのかなと思うと、これからは是非色々な学校と一箱本棚等で連携してしてもらいたいと感じた。

〔竹縄館長〕 現在、毎週のように中学校の生徒さんが図書館で体験学習をされている。他にも学校連携は多岐に渡っているところであり、今後も発展させていきたいと考

えている。

〔北河副委員長〕 私も一箱本棚が好きで今日も拝見した。小さなポップをたくさん付けて、良いポイントを狙って書かれていてすごく参考になり、図書館も明るくなるので、学校もそうだが、地域の団体や専門の団体など、そういう方達が推す本棚があっても楽しいかなと感じた。

〔加地委員〕 学校図書室との連携について、例えば電子図書館の利用や、団体貸し出しなど、学校によって利用の頻度や積極性にムラや格差がないかという疑問がある。もし、その利用が図書館との連携にあまり積極的でない学校があったら是非図書館の方から声を掛けていただきたいと思う。平等な読書環境があるといいので、利用がない学校に関しては、ぜひ積極的に声を掛けていただきたい。

〔竹縄館長〕 学校によっては利用の差異があるのは事実である。学校に訪問して図書館に期待することや要望等を伺うといった動きも始めているので、その中で小田原市立中央図書館、あるいは東口図書館としてできることを考えていきたい。

5 意見交換

(1)第7次小田原市総合計画第1期実行計画策定に係る意見交換について【資料3】

○事務局説明(竹縄館長)

○質疑応答

〔加藤委員〕 (資料3関連資料 P44)成果目標の項目におだわらデジタルミュージアムとあるが、大変ありがたいと思っている。なぜかという、短い時間の中で、例えば4年生の二宮尊徳の学習では、そこまで行くということがなかなか大変で、今学習端末でデジタルミュージアムの中に入って、色々な角度から見る事ができたり、小田原城の中であるとか、色んなものを映像で見ることができ、子供たちの興味関心を引いているし、大切な学習の教材として使わせていただきながら、小田原を愛する子供たちを育てているので、ぜひこれからも色々な教材を増やしてもらえたらありがたいと思っている。

〔竹縄館長〕 デジタルミュージアムに関しては、市役所の部局としては生涯学習課を中心に調整をしているところであるけれども、当然図書館も深く関わっており、図書館の貴重資料もデジタルミュージアムの中にあがっている。例えば昔のお城の図面であるとか、そういったものはやはりデジタルミュージアムにあげていると、資料の利用申し込みが、当然のことながら多くなる。まだまだデジタル化していない貴重資料もあるので、こういったものを順次コンテンツとして追加していきたいと考えているところであり、図書館としても協調していきたいと思っている。

〔北河副委員長〕 読書習慣の不読率が増加している原因はスマートフォンがすごく影響していて、やはり私も YouTube であるとか、色々なものを見ていてすごく魅力的というか、どんどん引き込まれて時間が経ってしまう。それで、読書の時間がなくなるということは本当にあり得ることだと思う。ある本に、読書する時間を作らないと、現代の人は本を読むことがなくなっていくと書いてあった。お

うちで本を読む習慣はとても大事だと感じている。図書館を利用して、より一層読書する習慣を高めていく上で図書館は第一だと感じている。学校との連携もとても大事だと感じている、具体的にはどうということは言えないが、やはりそれを私たちも考えていないと、本を読む人がいなくなってしまうのではないかという危機感を覚えている。

〔竹縄館長〕

現在はまさに図書館の存在意義というのが問われるところで時代的な潮目にある。一方、文部科学省でも、電子書籍の閲覧も読書であるという位置付けがあり、すべて電子データに移行していくべきものなのか、というところもあるが、まだまだ電子化しきれない部分であったり、インターネットではわからない知識であるとかそういったものを、提供できるものとしての存在意義は、PR する余地は、十分あると思っているので、そのあたりは読書の促進という意味でも、努めて参りたい。

〔野口委員長〕

読書習慣形成というのは、ここにも書いてある通り非常に重要なポイントだと思う。その時に図書館の果たす役割が大きいことは言うまでもないと思うし、書いてあるとおりである。もう1つ読書と深く関わるのは、書店の存在であると思う。市内の書店とコラボして、市民に読書ってこんなに楽しいよと訴えるようなイベントを共同開催するとか、そういう取組があってもいいと思う。

国の方の有識者会議もまとめの報告書を作るタイミングに来ているが、その中の1つに、書店との連携をどうするかという。どう位置づけようか、明記しようかということになってきている。書店さんはもちろん営利事業というか、民間事業ではあるが、一方で書店という商売の特殊性って、商品である本は商品であるとともに、やはり文化的資産である。そこを扱う意味では図書館と共通性というのもあり、何かそこで一緒になって小田原市の読書を盛り上げていく、そういう視点が位置付けられていてもいいのかなという1つの意見としてある。

もう1つが、この場でも、前の期からもたびたび話題になっている、旧保健福祉事務所、保健所跡地の活用検討、これが会議でも前の期以前からも話題になっていて、どうなるんだろうと気にかけてる委員さんも結構いる。それが活用検討すると明記されていて、そこも期待するところであるが、この具体的に検討は、動き出せそうな感じなのか。今後の展開を含めて、期待しているところである。

〔竹縄館長〕

書店連携については、小田原市内でも、チェーン店でない独立系の書店はかなり数が少なくなってきた。その中で、現在中央図書館は、一番最近に開業された南十字という独立系の書店があり、そちらの方を招いて、閉館後の夜の読書会をしている。こちらは先生のおっしゃる通り、この書店連携というものが文部科学省或いは経済産業省の方からも施策として打ち出されていると認識していて、こういったものと協調して、このような取組は今後も進めて参りたいなと考えているところである。

旧保健福祉事務所跡地については、総合計画への位置付けとして、今後予算が必要になってくる頭出しの意味合いもあるので、おっしゃる通り、動きは考

えている。来年、ニーズを把握するため、ニーズの調査業務を委託することも考えているところであり、現在予算調整中で、できるかどうか定かではないが、図書館としては、いつまでも抱えているわけにもいけないので、何とか出口戦略は考えていきたいところである。

〔加地委員〕

不読率増加ということに対して、南十字さんとの夜の読書会というイベントの話を聞いて、子供向けの読書会もぜひ企画していただきたい。今、大人の読書会をイベントのチラシでよく拝見するが、子供向けで読書会をやれば、今読書が好きな子供たちは、1つの本について話し合えるお友達もできるし、例えば親が勝手に申し込んだとしても、今読まない子が読むきっかけにもなると思うので、ぜひ検討していただけたらと思う。

〔青柳統括責任者〕

東口図書館でも、大人向けの読書会を行っていて、子ども向けの読書会も来年度検討していけたらと思う。先ほど委員長から話のあった、書店と図書館というところで、東口図書館は有隣堂が運営していて、有隣堂というところを活かして何かできるのではないかというチーム意見もある。今まで、ビブリアバトルや、有隣堂が開発した読書推進カードのようなものを使ったイベントも行っていて、有隣堂は有隣堂として連携してやっていこうと思っている。有隣堂だからといって、他の書店を排除するということは全くなく、平井書店さんは色々なイベントを行っていて、チラシをこちらに置いて宣伝したり、こちらのチラシを平井書店さんに置かせていただいたりしている。

南十字さんは中央図書館と縁があってイベントをしているが、東口図書館では、真鶴の独立系の書店に置いてある ZINE という冊子を参考にして、その冊子の作り方や講座を来年 4 月に開催する予定で、そういったイベントを色々な書店と協力しながら行っていきたいと考えている。

〔野口委員長〕

小田原市民の方でも ZINE を作って、文学フリマとかで売っている方がいると思うが、中央図書館や東口図書館で集めたりしているのか。

なかなかその情報自体図書館で掴むのも大変だと思うが、一種の地域資料に当たるものかもしれない。また、灰色文献的である。販売しているのかどうかもそもそもわからないが、結構今盛り上がってるので、そういうのも図書館と上手くコラボしていく、応援していくという観点も面白いと思う。逆にそれが普段図書館を使わない人が図書館に興味を持ってもらうきっかけ作りになる可能性もあると思うし、あまり図書館の接点を私も知らないが、むしろそういうのが可能であれば、そういう講座づくり、講座を通して、そこで作られた ZINE を図書館で展示してみるとか、そういうのから始めてみても面白いのかもしれない。

〔青柳統括責任者〕

講座のときに ZINE を募集して、展示も同時にしようと思っている。それをそのまま蔵書にできるかは中央図書館とも相談しないといけないが、そういった紹介もしていけたらと考えている。

〔北河副委員長〕

そういうふうな講座とかをやってそれで皆さんに来ていただくのはある意味学びである。やはり図書館イコール学びの場ということになると、リピート率はすごく高くなると思う。そこは、大切なところではないかと、これからの小

田原の文化として大事なところではないかと私は思っている。やはりリピートできる価値がないといけない。ただ本が置いてあるだけだと、興味ないかもしれないが、何か図書館で学びが得られると思えば行きたくなるのではないか、そこら辺をこれから考えていただけると、もっと確かなものになると思う。

〔野口委員長〕 勝手な妄想だけで言うと、市内の本がある場所をめぐるスタンプラリーをやったら面白いのではないかと、図書館もそうだし、ネットワーク施設もそう、あと書店や文学館なんかを巡ることで、こんなに小田原には本のある環境がたくさんあるんだという、実体験をしてもらうのも、図書館のヘビーユーザーの方は十分理解していると思うが、そうじゃない市民の方の図書館や書店を含めた読書への入口として、全市的な催しがあっても面白いと思った。小田原市の図書施設とか書店とかを配置したような本のマップみたいなものはあるのか。そういうのがあってもいいかもしれない。例えば、先ほど一箱本棚の話もあったが、市内の中高の図書委員の子たちに作ってもらってもいいかもしれない。イラスト書くのが上手な子もいるじゃないですか。そういう手づくり感があるようなマップがあって、それをなおかつ市民だけでなく、小田原駅の周辺において観光客にも、手にしてもらったりするのもいいかもしれない。

〔竹縄館長〕 県の図書館協会が、神奈川県全体の図書館の配置図のようなものを作られていて、どこかで配られているとは思いますが、おっしゃるとおり、小田原市の図書室図書コーナーを含めたマップというものは、図書に特化したものとしてはないと思うので、今いただいたアイデアも生かせないか検討させていただきたい。

・事務連絡(藤原主事)

次回の図書館協議会は、2月19日に開催予定。(その後、日程変更があり3月24日開催予定)

6. 閉会

〔三樹係長〕 これをもって、図書館協議会を終了する。